慶応三年・王政復古政府期における越前藩の政治動向

教科・領域教育学専攻
社会系コース
M06217C
轟　和也

Ⅰ.研究の目的と方法

1.研究の目的

本稿は王政復古政府期における越前藩の政治動向を明らかにすることを目的としている。

近年、幕末維新史研究の成果は著しく、従来の通説が大きく書き換えられている。その理由として、西南雄藩討幕派史観から脱却し、倒幕派以外の視点での研究が増えていることなどが挙げられる。また、「公議」に注目して近代国家に関連づけた枠組みでの研究も行なわれている。

その際、近代国家成立の端緒としての王政復古政府における越前藩をふくむ公議政体派の動向は解明すべき重要な研究視角である。しかし、当該期の公議政体派を主体とした研究はほとんどない。

そこで、本稿では王政復古政府期の越前藩の政治動向を再検討・再構成していく。

2.研究の方法

当該期の政治過程を越前藩の視点で考察する。

その際、政治活動や政治選択の背景を明らかにするために、政治過程の一連の流れという点を重視して考察する。

Ⅱ.論文構成

序章　論題設定の理由と研究の意義
第一章　幕末維新史研究史と先行研究の分析
第二章　大政奉還前後の政治過程
　　―春嶽の帰国・上京問題―
第三章　王政復古政府期の政治過程
　　―中央政局での周旋過程―
第四章　戊辰戦争への政治過程
　　―軍事的衝突回避と越前藩政治活動の限界―
終章　成果と課題―当該期研究における私見―

Ⅲ.研究の概要

第一章では、先行研究の分析を行い次の問題点を明らかにした。

①倒幕派主体による政治過程
②視点のブレ
　(1)「倒幕派からみた諸勢力」の視点
　(2)「各勢力という枠の中の対象藩」の視点
③視点のブレによる断続的な政治過程

この問題点に対し、王政復古政府期を対象時期として越前藩に視点を置き、その政治過程を一連の流れという点を重視して政治活動と行動選択の背景・要因を明らかにすることとした。

第二章では、大政奉還前後における政治過程を考察した。その結果、これまで空白部分となっていた当該期の帰国中の政治過程を考察することで、その後の行動を規定する要因（情報収集・失望感・親藩意識）を明らかにした。

また、先行研究の越前藩の「傍観者」との評価に対して、帰国中ではあったが中央政局との関係は断ち切れてはおらず、越前からは中央政局へ情報収集を行い、中央政局からも強く上京を依頼されるといった開かれた関係は維持しており、当該期の越前藩は中央政局から離れてはいたが、自身も周囲からも中央政局への政治参加が志向されている時期であり、「傍観者」ではなく、後の中央政

局での政治参加へ向けた過渡期と位置づけることができるとの見解を示した。

第三章では、王政復古政府期の政治過程を考察した。その結果、従来の後藤を主体とした政治過程に加え、公議政体派のなかでも多様な動きがあったことが明らかになった。また、当該期の政治過程は、公議政体派主体で動いており、倒幕派との対立関係は表面化していなかった。その背景には倒幕派との共通課題であった軍事的衝突危機と新政府の正当性という問題による政局の安定の必要性があった。この点に関連して、公議政体派の政治活動としても辞官納地周旋活動が徳川慶喜の政治参加という一貫した目的ではなく、新政府として共通した目的をふまえたものへと変化していったことも明らかにした。

第四章では、王政復古政府期から維新政府期への政局と勢力構造の変容を越前藩に視点を置き、公議政体派の立場で考察した。また、春嶽の本心とそこからうかがえる越前藩の幕末期を通じた政治的立場について検討した。

その結果、鳥羽・伏見の戦いを契機として倒幕派と公議政体派の勢力構図が逆転し、その後公議政体派は政治の場から疎外されていくこととなり、この勢力構造の変容は越前藩の政治的権威の後退ともなった。越前藩をみれば、その背景には徳川勢力の衰退があり、徳川宗家を思う越前藩の心性にも影響を与え、越前藩の政治的活動そのものの限界をも意味することとなったことを春嶽の本心を通して明らかにした。

Ⅳ.研究の成果と課題

1. 研究の成果

当該期の越前藩に視点を置いた政治過程の考察を通して、春嶽ひいては越前藩の「幕府と中央政局両方を配慮し続けた」政治的立場と、両者間を周旋し続けた政治活動を通してみえる苦悩の様子など、幕末期から明治期へと移行する期間の政治勢力の権力移行過程を倒幕派でもなく幕府でもない、公議政体派の越前藩の視点から明らかにした。

また、当該期越前藩研究の論点・争点に対して次の私見を示した。

①大政奉還賛同時期

(1)大政奉還による公議政体の実現へ尽力することを決意したのは、十一月十日に慶喜に直接面会したとき

(2)大政奉還に関するすべての疑念が解消されたのは十一月十六日に春嶽が土佐藩の意図を完全に理解したとき

②王政復古クーデター協力理由

次の四点の要因から、クーデターを受け入れ、参加する形の平和的移行によって公議政体を樹立し、新政府の中で慶喜の参画を目指したため

(1)薩摩藩の幕府の反正次第の行動

(2)平和的移行の必要性

(3)辞官納地受け入れ・修正の可能性

(4)外的要因

③王政復古政府における公議政体派勢力の優劣

公議政体派は王政復古政府成立当初からある程度の優位性をもち、倒幕派との協力体制な部分も持ちつつ政局の安定を目指していた。

④越前藩の政治的立場

「幕府と中央政局両方に配慮し続けた」政治的立場であり、その背景には徳川寄りの心性が根本にはあったことによる。

2.今後の課題

①当該期の藩内の状況や人物の考察

②別の視点の設置や違うアプローチによる研究

③様々な対象からの研究を通した幕末史の総体化

主任指導教員　　藤井　徳行

指 導 教 員　　藤井　徳行